

母親の「子どもイメージ」と育児との関係に関する研究

ー「子どもイメージ」に関連する要因分析ー

文珠紀久野¹⁾ 上田 由美²⁾ 小林 千江³⁾ 沢登 淳子⁴⁾

要 旨

乳幼児を持つ母親335名に、「子どもイメージ」の調査を行い、子どもの性別、年齢、人数、母親の年齢、子どもへの好悪感情、過去の育児経験、育児サポートとの関連を検討した。自我を主張する年齢の子どもに対してや複数の乳幼児の育児が同時に行われている場合や、母親の年齢が高くなると、子どもイメージはネガティブとなりやすい。反面、育児サポートがあったり、元来子どもへの好感情を抱いていたり、過去に子どもと接する機会を多く持っている場合には、子どもイメージはポジティブとなりやすい事が示唆された。

キーワード：子どもイメージ・育児経験・育児サポート

<はじめに>

昨今、健診において問診や個別相談で育児に関する非常に細かい質問を受けることや、しつけに関するマニュアル的な方法を求められることがよく生じる。

こういった事の背景として、最近の母親は自分の子どもを持つまでに「子どもと関わる経験」を十分持たず、さらに、「子ども」の特性を体験的にも学習するチャンスに出会うことが少なかったからではないかと考えられる。

また、子育てを支援し、様々な情報源となる子育て経験者が身近に無く、マスコミを通して情報を得、かえって過剰な情報に振り回され、子どもの少しの変化にも過敏に反応する傾向があるのではないかと考えられる。

自分の子どもが初めて関わる「子ども」であり、その上、育児に関して相談する相手が身近に無く、どのようにして子どもと関わり育てればよいのか困惑している状況である。さらに、数少ない子どもを大切にかつ自分たちの願いに沿ったように育

てたいという欲求故に、子育てそのものが“ストレス”となっている現状があるのではないかと推測される。そういった様々な要因が母親のストレスを強め、子どもとの関わりを阻害しているのではないかと考えられ、そのことが、逆に子どもにとっては親から十分な愛情を得ることができにくくなり、親に取ってみると「かわいげのない子ども」「自分を困らせる存在」と見なされ、さらに、愛情を得るチャンスを困難にさせるという悪循環がそこに成立してしまうのではないかと考えられる。

こういった状況に対して、できる限り住民のニーズに沿った育児サービスとサポートを提供するには、現在行われている乳幼児健診の場を有効にかつ効果的に活用する必要があると考え、一連の研究を行い、健診の改善に関しては、1997年に報告を行った。(沢登 1997)⁽¹⁾

今回は、母親が子どもに対してどのような意識を持ち、その意識に関連する要因を探るために検討を行った。

(所 属)

1) 山梨県立看護大学

2) 3) 4) 若草町役場健康増進課

(専攻分野)

発達心理学、臨床心理学

地域看護学

<目的>

乳幼児をもつ母親の育児意識を明確化し、乳幼児健診において、母親の立場に立った育児相談活動が実施できる基礎データを収集する。さらに、現在の母親が有している子どものイメージの様相を検討し、それに関連する要因を探求し、今後の健診における育児指導の方法・手段を改善する示唆を得ることを目的としている。

<方法>

①被験者

子育て中の母親 335名 (平均年齢 29.9歳、Min. 21歳～Max. 42歳、SD 4.23)

平均子ども数 1.84人 (SD 0.75)

被験者の子どもの状況の内訳を表1に示す。

表1 被験者(子ども)の内訳

	0歳児	1歳児	3歳児	合計
男	87(26.0)	42(12.6)	48(14.3)	177(52.8)
女	67(20.0)	47(14.0)	44(13.1)	158(47.2)
	154(46.0)	89(26.6)	92(27.4)	335(100.0)

人数 (%)

②調査方法

乳幼児健診に来所した母親に調査への協力を依頼し、健診終了時までアンケートに無記名で回答してもらい、健診終了後に回収する方法を採った。アンケートの回収率は100%であった。

③調査期間

1997年4月～1998年6月までの乳幼児健診時に実施した。

④調査内容

調査内容は

A、母親に関する項目：年齢・兄弟数・出生順位

B、健診に来所した子どもに関する項目：子どもの性別・年齢・出生順位

C、育児経験に関する項目：子どもに対する好悪・過去の育児経験の有無・育児サポートの有無

D、子どものイメージ：子どもイメージに関する項目を32項目抽出し、「非常にその通り」「かなりその通り」「少しその通り」「そんなことはない」の4段階での評価を用いて行った。

<結果と考察>

子どものイメージに関しては、「非常にその通り」に3点、「かなりその通り」に2点、「少しその通り」に1点、「そんなことはない」に0点を与え、評価値とした。

1. 全体の子どものイメージ

子どもに対するイメージを評価の高い順に並べた図1をみると、“かなり当てはまる”イメージとして、「おもしろい」が一番高く、次いで「いとおい」「ほほえましい」「あかるい」「たのしい」「うれしい」「あたたかい」「すばらしい」「やさしい」「ういういしい」「いじらしい」のイメージがみられる。

“やや当てはまる”イメージとして「すがすがしい」「みずみずしい」「うつくしい」「むずかしい」「よわよわしい」「あまい」「やかましい」「うるさい」がある。

“当てはまらない”順にみると、一番低いのは「くさい」であり、次いで「あつかましい」「くるしい」「はずかしい」「わずらわしい」「うらめしい」「うっとろしい」「てれくさい」「いらだたしい」「めんどろくさい」「こわい」「じれったい」「なれなれしい」となっている。

全体的にみて、子どもに対しては大部分がプラスイメージであるが、少なくともマイナスイメージも持ち合わせている。また、育児に対して楽しい面だけでなく、難しさ、手強さも感じている様子が伺われる。

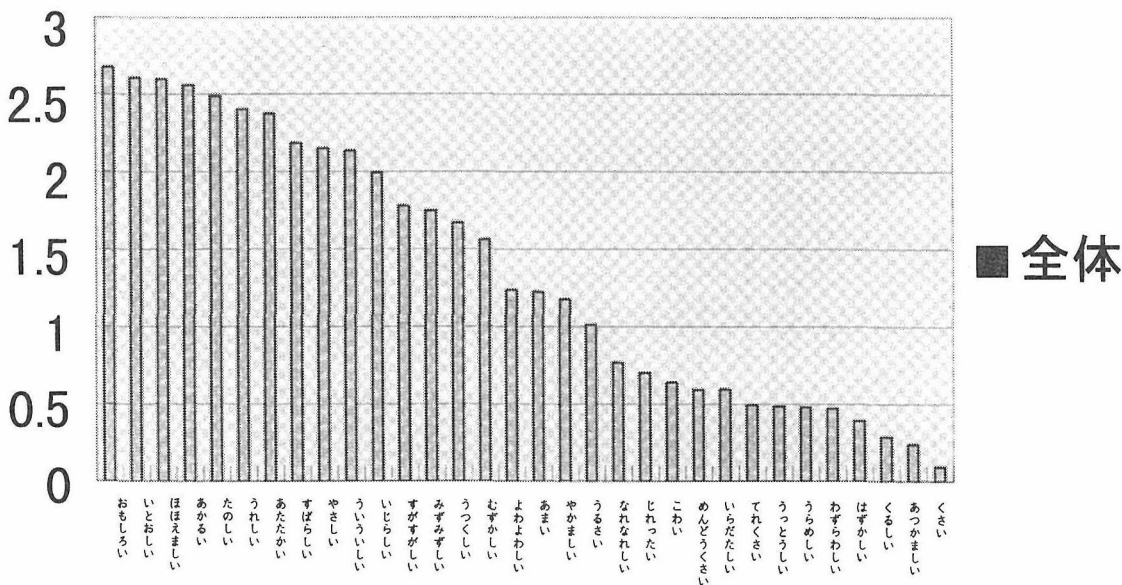


図1 全体の子どものイメージ

表2 子どもの年齢別性別による子どものイメージ

		(ㇿ)				(ノ)				(ハ)				(V)			
		0	1	3		0	1	3		0	1	3		0	1	3	
項目	性別	男 児								女 児							
下降 (ㇿ)		うれしい、くさい、うつくしい								ういういしい、たのしい、うつくしい							
上昇 (ノ)		めんどくさい、たのしい、わずらわしい、 うっとうしい、うるさい、 はずかしい、やかましい、あつかましい、 むずかしい、おもしろい、あまい、 いらだたしい								めんどくさい、うっとうしい、じれったい、 うるさい、はずかしい、やかましい、 あつかましい、むずかしい、あまい、 いらだたしい、すがすがしい、くるしい、 くさい、てれくさい、あかるい、 なれなれしい、みずみずしい、やさしい、 うらめしい							
山型 (ハ)		すがすがしい、ほほえましい、てれくさい、 なれなれしい、こわい、みずみずしい、 うらめしい、じれったい、くるしい								わずらわしい、すばらしい、いとおしい、 おもしろい							
谷型 (V)		あかるい、あたたかい、ういういしい、 やさしい、すばらしい、いとおしい、 いじらしい、よわよわしい								あたたかい、よわよわしい、うれしい、 ほほえましい、こわい、いじらしい							

2. 子どもの男女別、年齢別の子どもイメージ

子どもの性別と、0、1、3歳の年齢別の子どものイメージを表2に示す。表中の下降は、年齢が上がるにつれそのイメージが減少する項目、上昇は、年齢が上がるにつれイメージが増加する項目、山型は1歳時にそのイメージが増加する項目、谷型は1歳時にそのイメージが減少する項目であ

る。

年齢が上がるにつれて、マイナスのイメージを持つ母親が増えている。これは、男女とも年齢が上がるにつれて活動が活発になり、また、言語も発達してくるため、「うるさい」「やかましい」「うっとうしい」などのマイナスイメージを持つのではないと思われる。子どもが成長すること

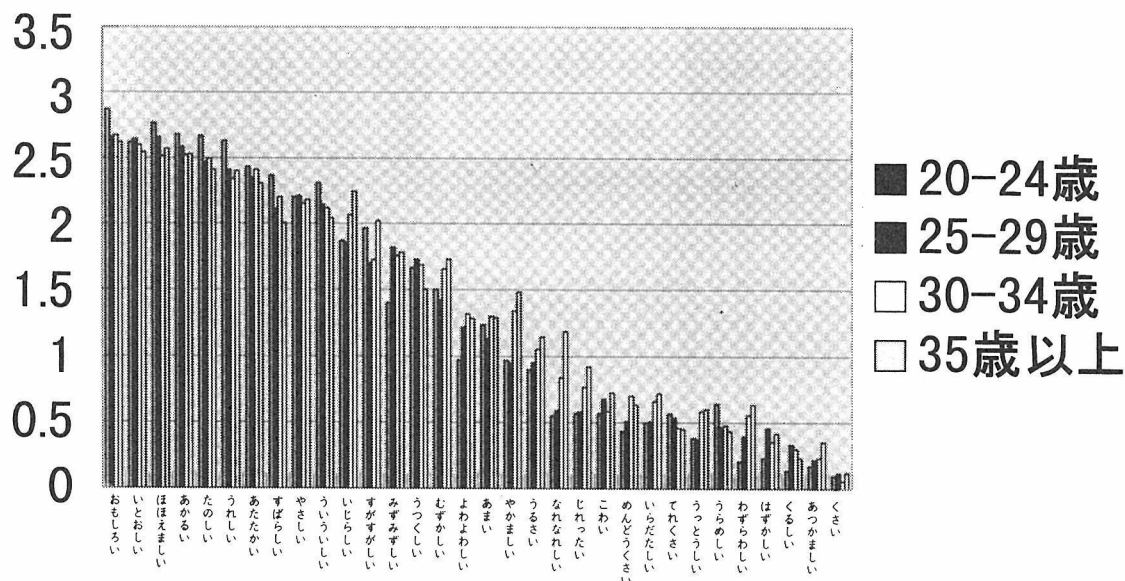


図2 母の年齢別子どものイメージ

で活動が活発になりマイナスイメージを持つ母親が多いことから、成長に応じた育児支援を行うことが必要と思われる。

1歳代に上昇、下降する項目をみると、子どもへの愛おしさと、育児のおもしろさの増加もみられるが、育児の煩雑さ、大変さが強調されるようにもなることが示唆される。

3. 母親の年齢と子どものイメージ

母親の年齢別子どものイメージを図2に示す。母親の年齢によって子どものイメージの捉え方の変化を検討したところ、「おもしろい」「ほほえましい」「あかるい」「たのしい」「うれしい」「すばらしい」「ういういしい」などのプラスイメージは20歳代、ことに20-24歳の若い母親に高いことが分かった。

逆に「むずかしい」「やかましい」「うるさい」「なれなれしい」「じれったい」「いらだたしい」「うっとうしい」「わずらわしい」「あつかましい」等のマイナスイメージは母親の年齢が上がるにつれて高くなる傾向がみられた。これは、母親の年齢が上がると、複数の子どもを持つことが多くなり、子どもの年齢が上がることによって活動量が増すこと、母親自身が年齢上昇と共に「疲れやすい」等の身体的な訴えが多くなることがその要因ではないかと考えられる。

4. 出生順位別子どものイメージ

出生順位別子どものイメージを図3に示す。

「むずかしい」「やかましい」「くるしい」のイメージは、下に弟妹がいる群の母親が強く感じている。

「うるさい」「なれなれしい」「じれったい」「めんどくさい」「うっとうしい」「わずらわしい」等のイメージは、上に兄弟がいる群の母親が強く感じている。

弟妹がいる群では、弟妹が小さければ小さいほど、第1子以外にもその世話や対応に追われるため、難しさや苦しさを感ずき、やかましく思うのではないかと考えられる。

また、特に「むずかしさ」は感じているようであるが、兄弟の年齢差が2～3歳くらいでは育児へのイメージがマイナス傾向になりやすいことが示唆された。

上に兄弟がいる群では、1歳以上の子どもが複数いることになる。上の子の退行や成長発達に伴う言語数の増加、行動範囲の拡大等があり、うるささや煩わしさを感じているのではないかと考えられる。

5. 子どもへの好悪感情別子どものイメージ

子どもへの好悪感情別子どものイメージを図4に示す。

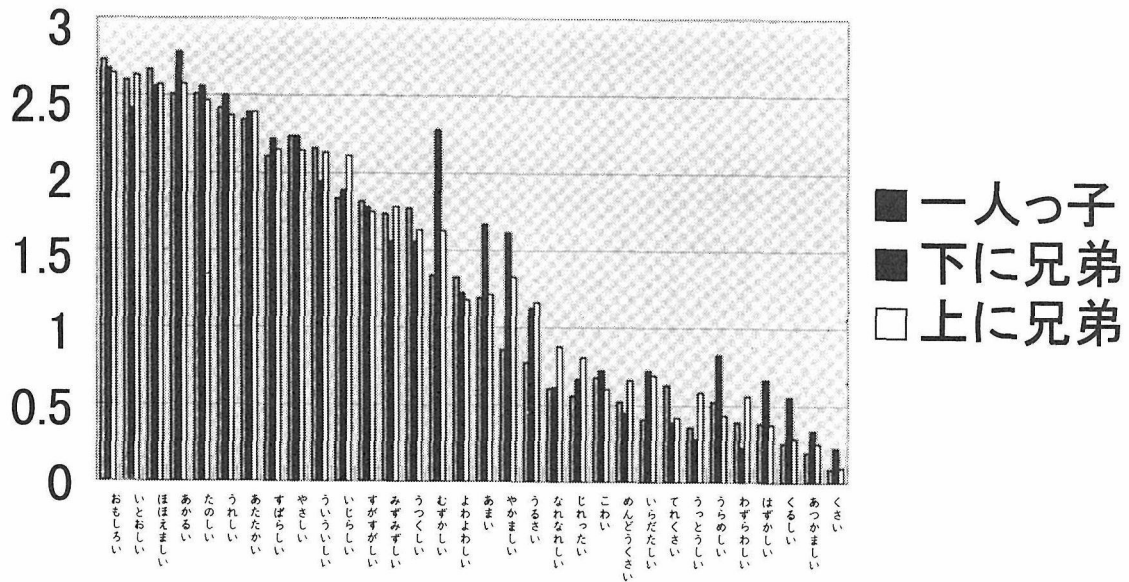


図3 出生順位別子どものイメージ

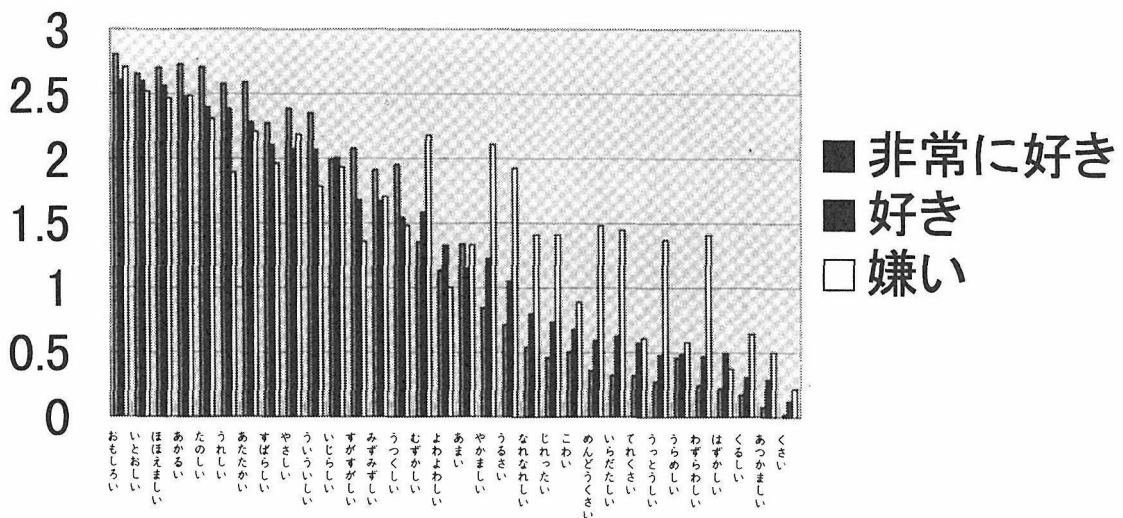


図4 子どもへの好悪感別子どものイメージ

「ほほえましい」「あかるい」「たのしい」「あたたかい」「ういういしい」「うつくしい」等のプラスイメージは、非常に子どもが好きという母親に高く、逆に「やかましい」「うるさい」「なれなれしい」「めんどくさい」「いらだたしい」「わずらわしい」「あつかましい」「ういういしい」等のマイナスイメージを持つのは、子どもが嫌いという母親に高かった。

このことから、子どもが好きか嫌いかという感情によって、子どもの特徴を受け止めるイメージに相違がみられることが示唆された。

6. 過去の育児経験別子どものイメージ

過去の育児経験別の子どものイメージを図5に示す。過去に育児経験がない群は、過去に育児経験がある群に比べ、子どもに対して「うるさい」「やかましい」「いらだたしい」等のマイナスイメージを強く感じる傾向にある。

過去に育児経験がある群の方が、プラスイメージを抱きやすい。これは、過去に育児経験をしていることで、子どもとはどのようなものか捉えられ、受け入れることができ、マイナスイメージをあまり持たずに子どもと接する事が出来るのではないかと考えられる。

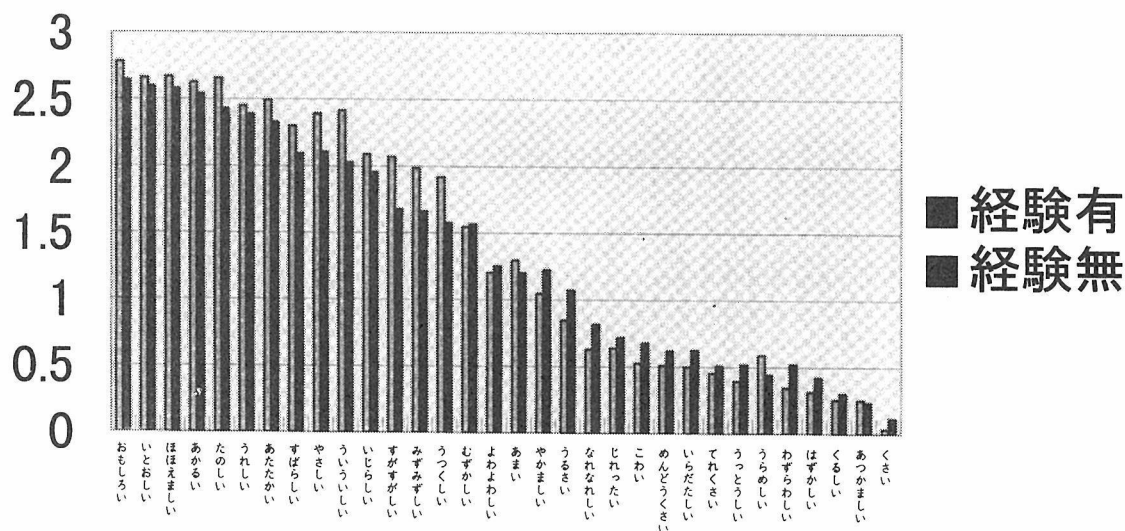


図5 過去の育児経験別子どものイメージ

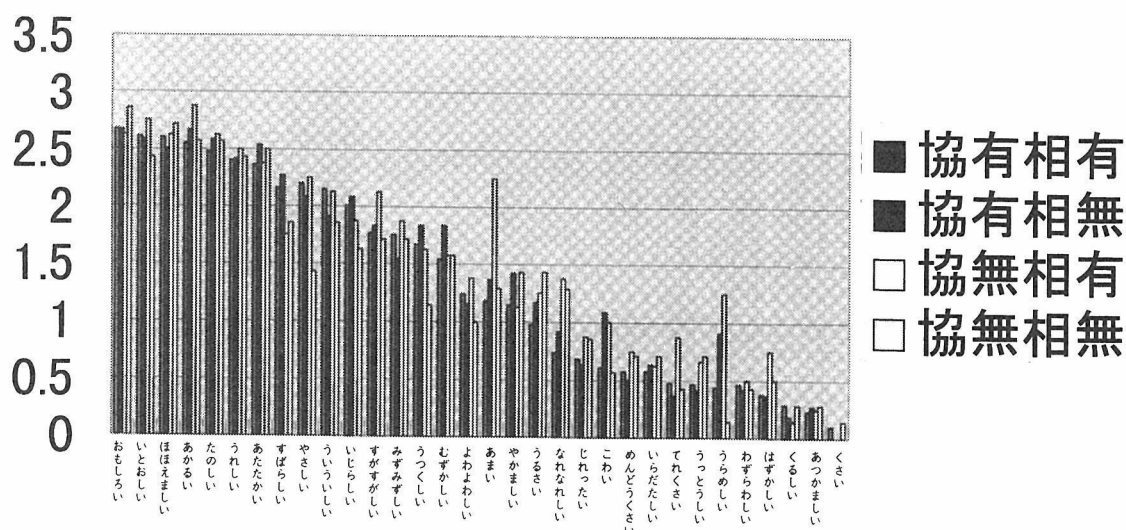


図6 夫の育児協力別（含相談）子どものイメージ

少子化により、子どもと接しないまま母親になる女性が増えている。子どもに接する機会を増やすことでマイナスイメージをもつ可能性が少なくなるのではないかと考えられる。思春期等での教育の必要性、妊婦への指導の強化が重要となってくる。

7. 過去の育児経験と子どもへの好悪感情との関連

子どもへの好悪感情は子どものイメージに影響を与えているが、表3に示すとおり、過去の育児経験と子どもへの好悪感情間には5%水準(χ^2 検定)で有意差がみられる。

このことは、過去に子どもと接する機会を持っていた母親は、子どもに対してより好意を持ち、逆に子どもと接する機会が少なかった母親は、子どもに対して嫌悪感を抱きやすい事が推測される。

表3 過去の育児経験と子どもへの好悪感情との関連

経験の有無	経験有り	経験無し	合 計
好 悪			
好 き	87	217	304
嫌 い	4	24	28
合 計	91	241	332

人数^{注1}

る。あるいは、逆に子どもが好きである故に子どもと接する機会をより多く持ち、子どもに対する嫌悪感がある故に子どもと接することを回避してきたとも考えられる。

しかしながら、できるだけ子どもと接し、子どもに対する好意を醸成しておくことは、育児を実践する上でかなり影響を及ぼす要因であると考えられる。

8. 夫の協力と子どものイメージ

夫の育児協力と子どものイメージを図6に示す。夫の育児協力の有無と子どものイメージに関して検討してみたところ、育児協力のある群の方が「やさしい」「うつくしい」「すばらしい」「いじらしい」等のプラスイメージが高かった。逆に、協力のない群では「うるさい」「うらめしい」「うっとうしい」「こわい」「はずかしい」「なれなれしい」等のマイナスイメージを持つものが多かった。

続いて、夫への育児相談の有無と子どものイメージの関係について、育児協力と関連させてみると、育児協力があると答えた群の中でも夫への育児相談のない群の方が「やかましい」「むずかしい」「うるさい」「こわい」「うらめしい」とマイナスイメージを答えたものが多かった。

育児協力がいない群では、もともとマイナスイメージを持つものが多いが、その中でも夫への育児相談があるものは、「いとおしい」「あかるい」「やさしい」「ういういしい」「すがすがしい」「うつくしい」などプラスイメージを持つものが多い。

また、夫の育児協力も相談もないと答えた群では、プラスイメージのうち「すばらしい」「やさしい」「うつくしい」と答えたものが他の群よりも少なかった。このことから母親への育児サポートの有無が子どものイメージに影響を与えていることが伺えた。

<今後の課題>

母親の立場に立った育児相談を展開するためには、母親の育児へのマイナスイメージについての具体的問題をより精密に分析する必要があると考えられる。

そのためには、子どもの性別、年齢、子どもの数等を考慮に入れ、母親により詳細なインタビューを行い、具体的生活場面での具体的問題を検討することが重要であると考えられる。

また、子どものイメージに影響する要因として、母親が過去に自分の母親からどのような育てられ方をしたのかという過去の親子関係や、現在の母親の心理状態、心身のストレス、体調、自己受容度も挙げられる。

こういったことを踏まえながら、育児支援の具体的プログラムを開発することも重要であると考えられる。たとえば、妊婦に対する講座内容の見直しなども必要と思われる。

育児サポートの有無が育児意識や行動に影響を与えることから、現在の育児支援活動の評価を行うと共に、母親が望み、必要とするサポートを検討することも今後の課題であると考えられる。

<謝辞>

本研究に快く協力して下さった多くの母親の方々に感謝の意を表します。

<参考文献>

- 1 沢登淳子, 上田由美, 小林千江, 文珠紀久野 1997
多様化する母親のニーズと乳幼児健診のあり方(1)
—健診の改善を目指して— 全国地域保健婦学術研究会講演集 200-201.

注1 3名の無回答者により、合計332名となっている

A Study of the Effect of Mother's Child Image on the Childcaring

MONJU Kikuno, UEDA Yumi, KOBAYASHI Chie, SAWANOBORI Junko